

2025 年度 学外活動応援奨学金 報告書

フランスの近代風景画に関する調査

中央大学 文学部 人文社会学科 フランス語文学文化専攻 4 年
22E1412018B 小林莉緒

- 採用コース: 文学部学外活動応援奨学金 C コース (300,000 円)
- 実施調査目的地: フランス、パリ
- 調査期間: 2025 年 9 月 8 日(月)～2025 年 9 月 17 日(水)

目次

I はじめに

1. 調査概要
2. 調査日程

II 訪問地の分析

1. オルセー美術館

- ①施設概要
- ②調査結果

2. ルーヴル美術館

- ①施設概要
- ②調査結果

3. フォンテーヌブロー

- ①概要
- ②調査結果

4. オランジュリー美術館

- ①施設概要
- ②調査結果

5. カルナヴァレ美術館

- ①施設概要
- ②調査結果

6. プティ・パレ美術館

- ①施設概要
- ②調査結果

7. モルトフォンテーヌ

- ①概要
- ②調査結果

III.おわりに

- 1.調査を通して
- 2.今後の研究について
- 3.参考文献
- 4.参考サイト

I はじめに

1.調査概要

私は「カミーユ・コローの風景画における人物の描かれ方について」というテーマで、卒業論文に取り組んでいる。そこで取り上げる予定の作品を美術館で鑑賞し、風景画が描かれた場所を実際に訪れることによってクオリティを高めたいと考えたため、学外活動応援奨学金を利用して、フランス、パリでの調査を行った。

卒業論文で取り上げる予定の作品はカミーユ・コローの《モルトフォンテーヌの思い出》、《ホメロスと牧人たち》とニコラ・プッサンの《オルフェウスとエウリュディケーのいる風景》、コローと交流があったバルビゾン派の画家であるシャルル・フランソワ・ドービニーの風景画、象徴派の画家であり、理想的で抒情的な風景を描いたという点でコローと通ずるピエール・ピュヴィス・ド・シャヴァンヌの風景画である。

そのうち、コローの作品2点とプッサンの作品はルーヴル美術館に所蔵されている。実際に作品を観察したのちに、コローが風景画を描いたモルトフォンテーヌやフォンテーヌブローの森、描かれた実景を見ることでさらに作品の理解を深めることを目指す。

ドービニーの作品については、ルーヴル美術館、オルセー美術館、バルビゾン派美術館等を訪れた際に、コローの風景画と比較できる作品を調査する。またドービニーもフォンテーヌブローの森で風景画を制作していたため、コローと同様に作品と実際の風景を比較する。

シャヴァンヌの作品はオルセー美術館に多く所蔵されており、カルナヴァレ美術館、プティ・パレ美術館にも数点所蔵されている。パリ市庁舎やソルボンヌ大学の壁画で知られる画家であるが、今回の滞在期間中は一般公開されていないため、美術館での調査とする。

また、この調査で得た経験を将来美術館で学芸員として働くことができた際に活かしたいと考えている。卒業論文で取り上げる予定の作品を所蔵する美術館を中心に、それぞれの独自の取り組みや日本の美術館と異なる点を調査し、日本の美術館をより開かれた場所にするにはどのようにすれば良いかのヒントとしたい。

2.調査日程

- ・調査期間：2025年9月8日（月）～9月17日（水）
- ・宿泊先：Hôtel Aviatic 住所 10 rue Brezin, 75014 Paris

9月8日（月）成田空港発（AirFrance 直行便）→フランス、シャルル・ド・ゴール国際空港着

9月9日（火）オルセー美術館

9月10日（水）ルーヴル美術館

9月11日（木）フォンテーヌブロー調査（フォンテーヌブロー宮殿、バルビゾン村、フォンテーヌブローの森）

9月12日（金）オランジュリー美術館、カルナヴァレ美術館

9月13日（土）プティ・パレ美術館

9月14日（日）ルーヴル美術館調査

※ヴィル＝ダヴレー調査の予定であったが、ストライキのため変更

9月15日（月）モルトフォンテーヌ調査

9月16日（火）シャルル・ド・ゴール空港発（AirFrance 直行便）

9月17日（水）成田空港着

II 訪問地の分析

1. オルセー美術館 Musée d'Orsay

①施設概要



オルセー美術館は、1900 年にパリ万博博覧会に際してオルレアン鉄道の終着駅として建てられた駅舎の建物をそのまま利用した美術館である。「印象派の殿堂」と呼ばれるに相応しく、5 階の印象派ギャラリー（La Galerie impressionniste）にはエドゥアール・マネ《草上の昼食》や、クロード・モネ《睡蓮》など多くの人に知られる名画が並んでいる。

今回は、卒業論文でカミーユ・コロー《モルトフォンテーヌの思い出》との比較として取り上げる予定であるピュヴィス・ド・シャヴァンヌの作品を中心に、19～20 世紀の風景画を調査する。

②調査結果

パリミュージアムパスを購入して専用レーンに並んだが、平日にも関わらずかなり賑わっており、入館までに 30 分ほど時間を要した。入館の際に空港で行っているような厳重な手荷物検査があり、日本の美術館との違いに驚いた。帰国してからすぐにルーヴル美術館の「アポロンの間」で宝飾品の盗難事件が発生したので、厳重なセキュリティの重要性を実感した。

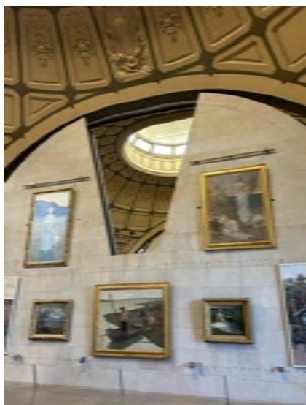
またパリミュージアムパスは最初の施設へ入場した時間から 48 時間有効となる 4days を使用した。そのため 4 日目のオランジュリー美術館はオルセー美術館に入館した時間よりも前に入らなければならないことに注意した。

【ピュヴィス・ド・シャヴァンヌの作品】

19 世紀フランスを代表する壁画家であるピュヴィス・ド・シャヴァンヌ（1824-1898）は象徴主義の先駆けとなった画家として知られている。ソルボンヌ大学やパリ市庁舎、リヨン美術館の壁画装飾を手がけた。特にリヨン美術館の《古代の風景》や《諸芸術とミュージシャンたちの集う聖なる森》のような自然と人間が調和した作品は、シャヴァンヌが取り組

んだアルカディア（理想郷）風イメージの真髄である。

オルセー美術館はシャヴァンヌの作品を約 300 点ほど所蔵しており、調査時は 15 点ほど展示されていた。



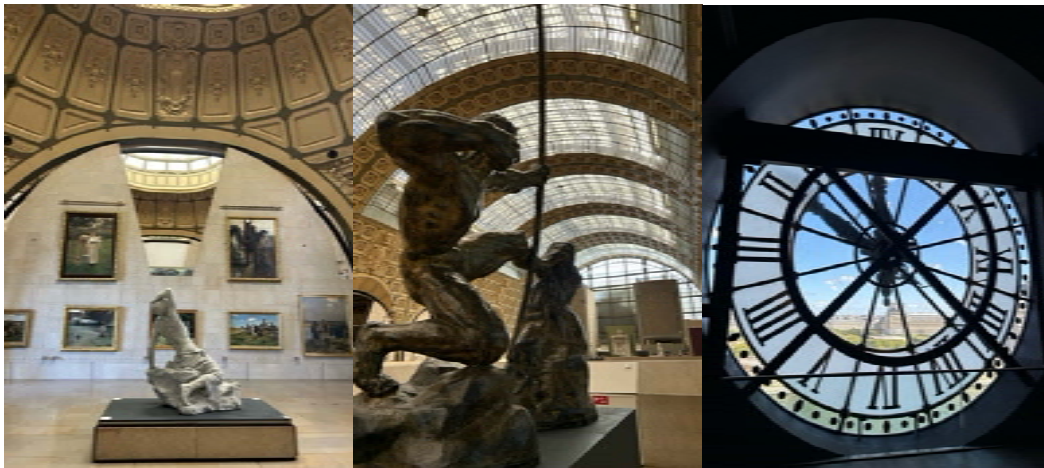
上段右：アルフォンス・オスベール 《幻視》
上段左：ピュヴィス・ド・シャヴァンヌ 《海辺の乙女たち》
下段左：同上 《夢》
下段中央：同上 《貧しき漁師》
下段右：同上 《希望》

その中でも、上の写真の上段右に展示されている《海辺の乙女たち》という作品をカミーユ・コロー《モルトフォンテーヌの思い出》と人物表現と自然との調和という点で比較し、作品観察から分析した。どちらの作品も古典的な雰囲気を持ちながらも、伝統的な歴史画のような物語性が希薄である。

《海辺の乙女たち》に描かれる 3 人の女性は三美神のようにも見えるが、アトリビュートが描かれていないため断言することはできない。このような古典古代の人物のように思われるも、アトリビュートが希薄、または省略されているため特定できないというのはシャヴァンヌの作品に共通して見られる特徴である。例えば、上の写真の下段中央に展示されている《貧しき漁師》に描かれる人物はどことなくキリストを思わせるが明確なアトリビュートがない。このことから、シャヴァンヌ古典古代の神話や宗教を思わせる人物を描きこむことで目指していたことは、伝統的な歴史画において重要視されていた特定の物語を表現することではなかったということが明確になった。



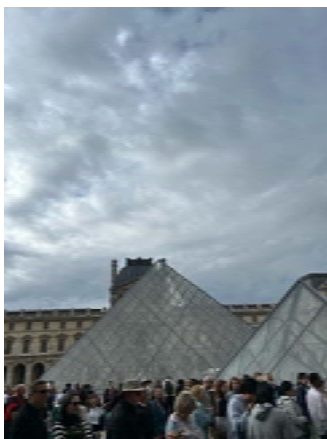
左:ピュヴィス・ド・シャヴァンヌ 《海辺の乙女たち》1879 年頃、カンヴァスに油彩、オルセー美術館、パリ
右：カミーユ・コロー 《モルトフォンテーヌの思い出》1864 年、カンヴァスに油彩、ルーヴル美術館、パリ



館内の作品はほとんどが撮影可能であり、どのように撮っても写真映えする迫力のある展示方法が特徴的であった。ただ、左上の写真のように、高い位置に展示された大判の作品は若干見づらかったため、シャヴァンヌの《海辺の乙女たち》も細かな質感や筆遣いを観察することができなかったのが残念であった。またフィンセント・ファン・ゴッホをはじめとする印象派の作品群は非常に混雑していたため丁寧に観察することが難しかった。しかし国際的で幅広い年齢層に愛される印象派の人気ぶりを再確認することができた。

2. ルーヴル美術館

①施設概要



1793年にルーヴル宮殿内に設立されたルーブル美術館は文字が発明された頃から19世紀半ばまでの作品を30万点以上所蔵しており、3万5千点ほどの作品を常設展示している。レオナルド・ダ・ヴィンチ《モナリザ》や《ミロのヴィーナス》、《サモトラケのニケ》をはじめとした人類の至宝といえる傑作を有する世界最大級の美術館である。今回は卒業論文で取り上げるカミーユ・コロー《モルトフォンテーヌの思い出》とニコラ・プッサン《オルフェウスとエウリュディケーのいる風景》を中心とした風景画を重点的に調査した。

②調査結果

・調査日 9月10日

ストライキによって開館が遅れていたため、午前中に時間指定予約をしていた人々が長蛇の列を作っていた。11時過ぎに開館後、3階にあるコローの部屋とイタリア風景画を中心回る予定であったが、ストライキのため終日封鎖されていた。何人かのスタッフに、全ての展示室が確実に開放されている日付を尋ねて、予約状況と調査計画とすり合わせた結

果、ヴィル・ダヴレーの調査予定日であった9月14日に再度訪れることを決めた。そのため、この日は解放されている展示室の調査を行った。

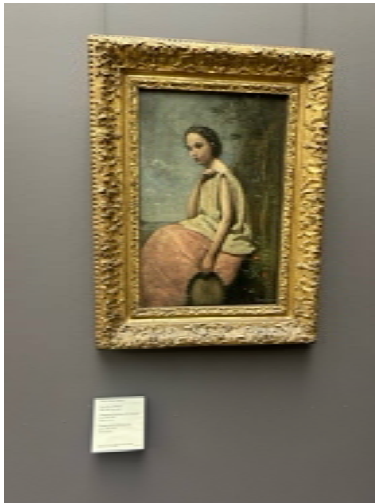


この日、一際多くの人を集めていたのはダリュ階段踊り場に展示された《サモトラケのニケ》であった。大理石でできているとは思えないほど、風を受けてなびく衣服の表現が繊細であったのが印象的だった。また真上の天井から差し込む太陽光によってその神々しさが際立っていた。

・再調査日 9月14日

この日はストライキも落ち着いており、全ての展示室が開放されていたため、真っ先にコロアの部屋へ向かった。開館してすぐだったためか、ほとんど人がいなかったのでゆっくりと作品を観察することができた。近年では大規模なコロア展が日本では開催されていないため、まとまった数のコロアの作品が見られたことに圧倒された。コロアの他に、ジャン・フランソワ・ミレー、シャルル・フランソワ・ドービニー等、バルビゾン派の画家たちの作品も展示されていた。





左：カミーユ・コロー 《タンパリンを持つジプシー》

右：カミーユ・コロー 《モルトフォンテーヌの想

展示室内にはコローの風景画だけではなく、画歴の後期に病のため屋外制作が難しくなったことから制作を始めた人物画も多く展示されていた。その中でも 1865 年から 1870 年ごろに描かれた《タンパリンを持つジプシー》と《モルトフォンテーヌの思い出》を比較して分析をした。

《モルトフォンテーヌの思い出》では花摘みをする女性と子供たちが描かれている。また同時期に描かれた《カステル・ガンドルフォの思い出》では山羊飼いが描かれているが、そのほかの「思い出」の風景画では釣り人や農夫、浴女などが描き込まれている。いずれも共通しているのは自然と共生する人々の姿である。

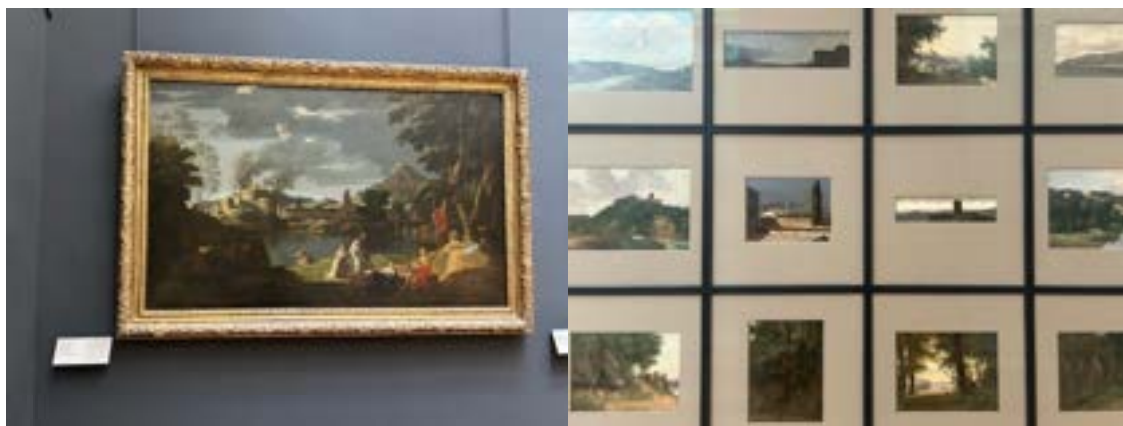
オルセー美術館での調査で作品を取り上げた、シャヴァンヌは、産業革命による都市化や工業化によって自然が急速に失われていくことへの懸念、さらに 1870-1871 年の普仏戦争の敗北によるフランス社会の動乱の影響から、アルカディア的幸福を打ち出した作品を制作していたことが明らかにされているが、コローの「思い出」の風景画においてもこの傾向が見られるのではないかと考えられる。

「思い出」というタイトルは私的とも考えられるが、人々に自然の中で社会的な不安から解放されて生きていた失われた時代を思い起こさせる意味もあるのではないかと考えられる。

また、「思い出」の風景画に描かれる人物たちは、シャヴァンヌの作品のように古典的な描き方に基づいている事が分析されているが、ルーヴル美術館で人物画を観察する中で、《タンパリンを持つジプシー》のようにローマ人女性が描かれている作品がいくつかあることに気づいた。この気づきから、《モルトフォンテーヌの思い出》に描かれている女性と子どもたちはローマ人の可能性もあるのではないかと考えたが、そのように主張している文献は調べた限りでは見つからなかった。

19 世紀はプリミティヴィズムが隆盛した時代であり、芸術家たちはローマ人に対して自然と共生し自由に生きているというイメージを持っていたことが、ロマン主義や象徴主義の作品から読み取ることができる。美化されたローマ人像は美術だけでなく、演劇や文学など

19 世紀の芸術に広く登場している。ローマ人女性と子どもたちは花を摘み売って収入を得ることもあったことから、《モルトフォンテーヌの思い出》に描かれた情景と繋がるのではないかと考えたが、花摘みは歴史画においても繰り返し描かれてきた古典的な主題でもあるため、慎重に検討するべきだと考えている。



左：ニコラ・プッサン 《オルフェウスとエウリュディケーのいる風景》
右：ピエール＝アンリ・ド・ヴァランシエンヌ 《習作》

卒業論文で取り上げた《オルフェウスとエウリュディケーのいる風景》は実際に見ると、絵肌が均一に整っており、アカデミーで重んじられた歴史風景画の仕上げの入念さが理解できた。精密に描かれた建造物や、繊細な木々の表現に丹念な観察の成果を読み取る事ができるが、それらは人物たちの物語の舞台として整えられている。構図に着目すると、水平方向への広がりを抑え、視線を中心に集めることによって、舞台のような印象をより強調していることがわかる。空と湖の水平方向への広がりをも木や岩によって堰き止めており、前景の人物たちに舞台照明のような光が当てられている。右は新古典主義の風景画家たちがこぞって学んでいたヴァランシエンヌの習作群であるが、歴史風景画はこのような屋外で制作した習作をアトリエで宗教や神話などの物語とともに構成することによって制作された。のちに、自然をありのままに描こうとする風潮が高まっていく中でヴァランシエンヌの習作は高く評価された。

3. フォンテーヌブロー

①調査地概要

・フォンテーヌブロー宮殿

フランスで最も大きな宮殿であり世界遺産にも登録されている。16 世紀はじめ、フランス王フランソワ一世はイタリア戦争でイタリアルネサンスに魅せられ、芸術家たちをフランスに呼び寄せた。《モナ・リザ》を描いたことで知られるレオナルド・ダ・ヴィンチもその 1 人であった。彼らの活躍の舞台の一つとなったのがフォンテーヌブロー宮殿である。ここでイタ

リアの画家たちに学んだフランス人画家たちが「フォテーヌブロー派」と呼ばれており、ルーヴル美術館でその傑作の数々を観ることができる。

・バルビゾン派美術館

1824年にフォンテーヌブローの森の入り口に創設されて以来、バルビゾン村に集った画家たちの拠り所となった「ガンヌの宿 (Auberge Ganne)」を改装した美術館である。常設展示はバルビゾン派の画家たちの絵画や彫刻作品に加えて、彼らが家具や壁に施した装飾で構成されている。

・ミレー美術館

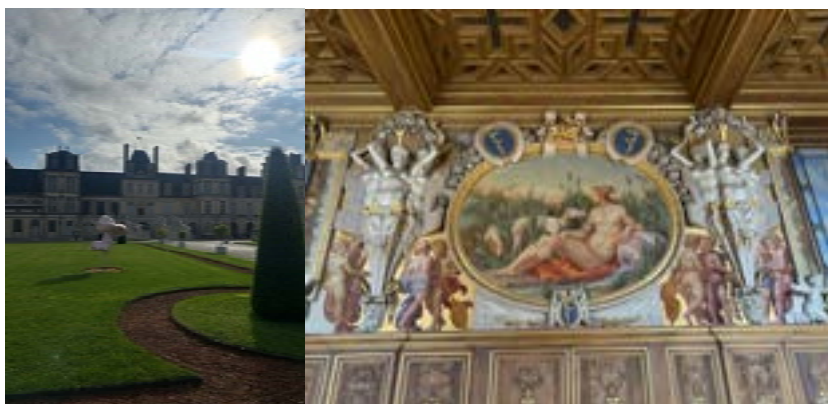
バルビゾン村にあるジャン・フランソワ・ミレーが家族と共に住んでいた家を改装した美術館である。小規模ながらもバルビゾン派の作品や資料を数多く所蔵している。またミレーがアトリエの中で《晩鐘》を描いた位置を見ることができる。バルビゾン村の周辺には《晩鐘》に描かれた麦畑が残されている。

フォンテーヌブローの森

パリの南東約 60km にある広大なフォンテーヌブローの森ではテオドール・ルソーやジャン・フランソワ・ミレーをはじめとするバルビゾン派の画家たちが 1820 年代後半から 40 年代にかけて風景画の制作を始めた。カミーユ・コローもバルビゾン派に含められる場合があるが、他の画家たちよりも早い 1822 年頃からフォンテーヌブローの森での制作を始めている。フォンテーヌブローの多種多様な植生や特徴的な巨岩は画家たちの創作の源となった。

②調査結果

・フォンテーヌブロー宮殿



フォンテーヌブロー駅からバスに乗りフォンテーヌブロー宮殿へと向かった。自然豊かで美しい広大な庭園は、時間が許せばもう少しゆっくり見て周りたかった。フォンテー

ヌブローはパリから近いため、古くは貴族たちの狩猟の地となっていたためか、狩猟の女神ディアナの庭園や回廊があり、狩猟をイメージした装飾が至る所に見られた。

・バルビゾン派美術館

バルビゾン村へのバスは少ないためタクシーで行くのが良いとガイドブックにあったが、タクシーに乗るために駅に戻った時、ちょうどいいバスがあったので乗ることにした。帰りもバスで戻る事ができたので、かなり出費を抑えることができた。バルビゾン村は建物がとても可愛らしく、まるでディズニー映画などに出てくるような風景であった。スーパーマーケットも見当たらないのどかな村であったが、村の入り口にディスコがあり、ダンスが好きなフランス人の国民性を伺うことができた。

バルビゾン派美術館では、最初にバルビゾン派を知るための映像を見せてもらえるが、英語だけでなく日本語字幕がついており、日本人がよく訪れるのだろうかと考えた。バルビゾン派の画家たちが過ごした宿がそのまま美術館となっており、彼らが落書きのように残した装飾から、ガンヌの宿とバルビゾン派の画家たちとの繋がりの強さを感じることができた。



・ミレー美術館



右上の写真の場所で、ミレーが《晩鐘》を描いたとミレー美術館のスタッフの方がとても丁寧に説明してくれた。大きな窓から差し込む光を浴びながらミレーがカンヴァスに向かう姿が想像された。限られた空間にミレーを中心としたバルビゾン派の絵画がびっしりと展示されており、奥にはミレーの紹介映像やバルビゾン派の画家たちの資料を展示する部屋、ミュージアムショップなど、手狭ながらも充実した美術館であった。

・フォンテーヌブローの森

ヴァランシエンヌが「イタリアの出張所」として、新古典主義の風景画家たちに屋外制作を勧め、バルビゾン派の画家たちの創作の源となったフォンテーヌブローの森は、自然保護区域に指定されており、彼らが描いた豊かな植生がそのまま残されている。この活動に貢献したミレーとテオドール・ルソーの記念碑をみることができた（下の写真左から 3 番目）。実際に訪れてみると、バルビゾン派の画家たちが描いた風景そのまま、彼らがどれほど丹念に自然を観察して描いていたのかがわかった。コローが風景画に描いた水辺を探してみるつもりでいたが、15 分ほどで雨が降ってきたため、早々に引き返してしまった。



4. オランジュリー美術館

①施設概要



オランジュリー美術館では、高さ約 2 メートル、8 点から構成されるクロード・モネ《睡蓮》の連作が展示されている大広間が人気を集めている。そのほか、画商ポール・ギヨームとその夫人たちによって集められた 146 点のコレクションが展示されている。19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて、印象派からエコール・ド・パリに至る近代絵画の流れを辿る事ができる。

②調査結果

ミュージアムパス 4 days 最終日のため有効期間内に入館できるように気をつけて美術館へと向かった。開館 15 分前ほどに訪れたが、すでに長蛇の列ができていた。特にモネの部屋は開館してすぐに人でいっぱいになった。モネの《睡蓮》にぐるっと囲まれた大広間はまるで絵画の中にいるような没入感があった。近年注目度が高まっているイマーシブ・ミュージアムのように感じたオルセー美術館で調査した風景画やバルビゾン派の風景画と比較すると、風景画における自由度の高まりをより実感する事ができた。



アンドレ・ドラン 《大きな木》

19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけての風景画を中心に調査してく中で、アンドレ・ドランの作品の木の描き方が面白いと感じたので、詳しく観察してみることにした。ルーヴル美術館で観察したプッサンの《オルフェウスとエウリュディケーのいる風景》のような歴史風景画では、自然は人物による物語の背景のように整えられて描かれており、コローの《モルトフォンテーヌの思い出》では、人物と自然が相互的に存在し、対等に描かれていた。これらに対して、アンドレ・ドランの《大きな木》では人物は描かれておらず、タイトルの通り、大きな木が主役として描かれている。フランス語の Gros は「大きな」という意味もあるが、「太った」という意味も併せ持っている。Grand ではなく Gros を使っていることが擬人化のような効果を生み出し、生き生きと描かれた木がよりコミカルでかわいらしい印象になっているのではないかと考えた。

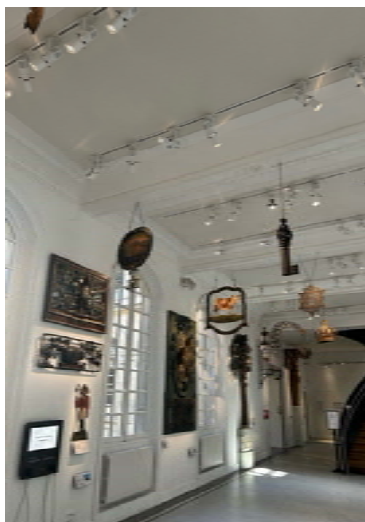
オランジュリー美術館の調査を通して、風景画の表現の追求が進み、画家独自の自由な表現が生み出されてきたことを再確認できた。

5. カルナヴァレ美術館

①施設概要

絵画や彫刻に加えて、家具、木工品、装飾美術品や歴史的オブジェ、看板、写真、デッサン、版画、ポスター、メダル、コイン、考古学コレクションなど幅広い作品を 3800 点ほど収蔵するカルナヴァレ美術館では、年代順に配置された展示によって先史時代から現代に

至るまでのパリの歴史を学ぶことができる。今回はピュヴィス・ド・シャヴァンヌの作品を中心に調査した。またカルナヴァレ美術館はユニバーサルアクセシビリティを実現するための取り組みに力を入れている。子どもや障がいのある人が楽しめるようにするための展示の工夫やデジタルデバイスの活用を行っていたことが特徴的であったため、この点にも着目して調査を行った。



最初の展示室の様子

1914年の7月、当時のフランス大統領であったレイモン・ポアンカレが開設した150枚ほどの看板が彩る展示室。パリの街並みが思い起こされる。

②調査結果



子どもの目線の高さに合わせて配置された作品が複数あったことや、アプリによる子ども向け音声ガイドの提供など特徴的な工夫が随所に見られる常設展示であったが、特に印象的であったのは視覚障がい者に向けた設備である。ほとんどのキャプションや解説パネルに点字がついていたほか、左上の写真のルイ14世の足の像のように触って形を確かめることができるオブジェがついていた。また、無料アプリによる音声ガイドもあったが、左

上の写真のように、ボタンを押すと解説を聞くことができる設備が各所に設置されていた。

【ピュヴィス・ド・シャヴァンヌの作品】



カルナヴァレ美術館はシャヴァンヌの人物デッサンを数多く所蔵しているが、今回は《伝書鳩》を観察した。1870 年から 1871 年の普仏戦争でナポレオン 3 世は捕虜になりプロイセンはドイツが統一することになる。フランスの政治家であったレオン・ガンベッタはパリから気球に乗り脱出して、伝書鳩でパリへと無事を伝えた。この作品はガンベッタから届いた伝書鳩を女性が抱いている場面である。鳩を襲おうとしている猛禽類を追い払う姿は、フランス国民を勇気づける希望の象徴的な存在として描かれているのではないかと考えられる。抑制した色彩は、この作品のメッセージ性を高めている。

ピュヴィス・ド・シャヴァンヌ 《伝書鳩》

6. プティ・パレ美術館

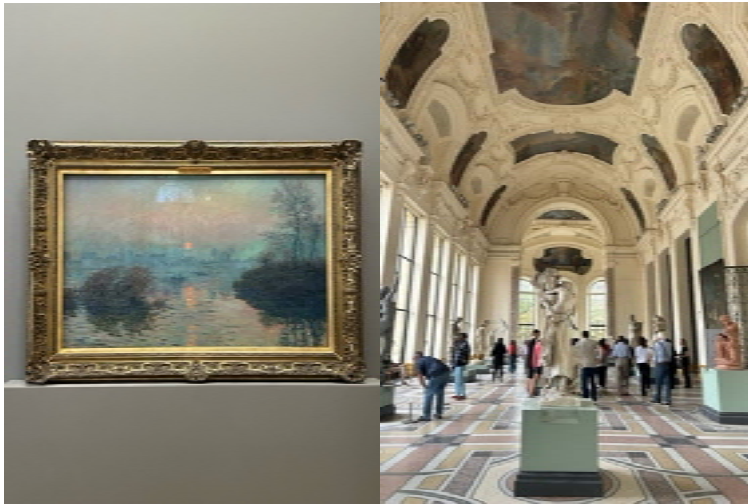
①施設概要



プティ・パレ美術館は隣接するグラン・パレ美術館と同様に、1900 年の万国博覧会のために建設され、1902 年に美術館として開館した。パリ市が 1870 年以降に入手した絵画や彫刻、または芸術家やサロンから直接購入した作品からなる 19 世紀後半から 20 世紀にかけての作品群がコレクションの柱となっている。今回はその中でも風景画に注目して調査を行った。

②調査結果

常設展は無料であったが、作品数が多く充実した内容であり、館内はかなり賑わっていた。入り口から入ってすぐの天井装飾と彫刻作品との組み合わせが美しく、写真を撮っている人がたくさんいた。パリの美術館を訪れるなかで、そのほとんどが撮影可能であることがとても助かった。さらに学生たちが授業の一環なのか、彫刻を囲んでデッサンをしていたのが印象的であった。日本の美術館ではあまり見られない光景だと考えた。



左：クロード・モネ《ラヴァクールのセヌ川に沈む夕日、冬の効果》

プティ・パレ美術館の常設展示で、特に人気を集めていた作品はクロード・モネの《ラヴァクールのセヌ川に沈む夕日、冬の効果》であった。マルモッタン・モネ美術館が所蔵している 1872 年の《印象・日の出》を思い起こさせるこの作品は、1880 年に雪の影響でパリの交通が麻痺するほどの厳しい寒さの中で描かれた。冬の冷たく長い夜が始まる前の、束の間の夕日を捉えた儚さを感じさせる作品である。

7. モルトフォンテーヌ



①調査地概要

モルトフォンテーヌはパリの郊外、シャンティイやサンリスに程近い小さな村である。コロはこの地にあるイギリス式庭園で度々制作を行った。コロが《モルトフォンテーヌの思い出》を描く 150 年ほど前、ロココの画家、アントワーン・ヴァトーは《シテール島の巡礼》の背景にこの地を描いた。

②調査結果



ジャン＝パティスト・カミーユ・コロー 《モルトフォンテーヌの思い出》1864年、カンヴァスに油彩、ルーヴル美術館、パリ

コローが《モルトフォンテーヌの思い出》を描いた池のほとりは現在私有地となっているため塀に囲われていたが、合間から写真を撮ることができた。季節と時間帯の影響もあるだろうが、《モルトフォンテーヌの思い出》は実際の風景と比べるとかなり色彩を抑えて描かれていることがわかる。モルトフォンテーヌは霧深い沼地として知られているが、今回訪れた際は真夏らしくカラッとした明澄な空気であった。午前11時ごろに訪れたため、早朝であればよりコローが描いたものに近い風景が見られたのかもしれない。コローが《モルトフォンテーヌの思い出》を描いたのは初夏であると言及している文献が多いが、明らかにされてはいない。実際にモルトフォンテーヌを訪れてみて、コローが記憶の中のさまざまな季節の情景を総合して思い出という形で描いたのではないかと仮定すると、薄く靄がかかったような表現は、実際に目にした風景をそのまま描いたというよりも、そこから受けとった情感を表すための演出的な意味合いを持っているのではないかと考えられる。この描き方は「思い出」という主題へのつながりを思わせるが、この時期のコローの作品に度々見られる表現である。

またこの作品は緻密な自然観察に基づいて、アトリエで再構成して描かれたが、前景に描かれている花々は実際にあったものなのか、花摘みという主題を描くために画家が付け足したものなのかということを確認したいと考えていた。現地での調査を通して、地面に描かれている小花は、自然観察に基づいて描かれたものであっても不自然ではないと考えたが、画面左側の木に咲いている花は、花摘みという主題に合わせて付け加えたものだろうと考えた。

実景との比較を通して、《モルトフォンテーヌの思い出》はモルトフォンテーヌという実在する土地を題材としていながらも、画家の感情を通したユートピア的な風景なのではないかという考察に至った。

III.おわりに

1. 調査を通して

本調査では、フランス近代の風景画について、カミーユ・コローの作品を中心に美術館と風景画に描かれた場所を訪れることによって分析した。さらに、世界中から人々を集めるフランスの美術館の特色やその取り組みについて調査し、日本の美術館に取り入れることができれば良いと思う点を考察した。

特にフランス近代の風景画の流れを掴むために、ルーヴル美術館の体系的な常設展示は非常にわかりやすく学びを得ることができたと考えている。歴史画が最上位であったアカデミーにおいて、歴史画の幅を広げるために、1816年にローマ賞に歴史風景画部門が創設された時点では、風景画の主体は規定のサイズ以下で描きこまれた神話や聖書に基づく人物であった。コローの師であった新古典主義の風景画家、ミシャロンやベルタン、さらに彼らの師でありコローにも大きな影響を与えたヴァランシエンヌは屋外制作の重要性を認めたがあくまで屋外でのスケッチはあくまでアトリエで完成作を作るための材料に過ぎなかった。ルーヴル美術館でヴァランシエンヌの習作群を観察すると、画家の関心が確実に風景に向いていたことを再認識できた。さらにコローの初期の作品とのつながりを認めることができた。

1820年代後半から40年代にかけてフォンテーヌブローの森で盛んに制作を始めたバルビゾン派の画家たちは自然をありのまま描くことに努め、人物による物語を排した風景画を描くようになった。バルビゾン派美術館でバルビゾン派の画家たちの歩みを学んだ後、フォンテーヌブローの森で彼らが描いた風景を目の当たりにすると、木々や岩の細部に至るまで自然を入念に観察し、緻密に描いていたことが再確認できた。

さらにこのような風景画は形骸化しつつあった歴史風景画よりも表現の自由度が高いことから画家による独自の追求が進んでいった。鉄道の発達や持ち運びが容易なチューブ絵の具の開発によって、画家たちが写生旅行をしやすくなったこともこの風潮を後押しした。バルビゾン派の画家たちは屋外で制作したカンヴァスをそのままサロンに持ち込むことはほとんどなく、アトリエで再構成をしていたが、その後に登場する印象派の画家たちは習作と完成作の区別はさらに曖昧になっていく。また自然を緻密に観察し、ありのままに描き出そうとするバルビゾン派の画家たちとは違い、大気や光などの移ろいゆくものの瞬間を捉えることを試みていた。プティ・パレ美術館やオランジュリー美術館、オルセー美術館ではバルビゾン派以降の画家たちの作品がまとめて展示されていたが、画家たちによって切り拓かれた多様な風景表現を見直すことができた。

また本調査で訪れた美術館が行っていた美術館を誰に対しても開かれた場所にするための工夫の中で、特に日本の美術館にも取り入れることができれば良いと思ったものは、カルナヴァレ美術館のユニバーサルアクセシビリティに関する取り組みである。無料アプリによる音声ガイドはさまざまな言語で聴けるだけでなく、子ども向け、大人向けの解説が用意されていた。さらに、今回調査した美術館ではHPの言語設定が英語、フランス語

の美術館が多かったが、カルナヴァレ美術館は日本語も用意されていたので調べやすかった。また充実した常設展示を誰でも無料で鑑賞できるので気軽に行きやすく、観光の際などに選択肢に入りやすいと思った。日本でもアーティゾン美術館などで無料の音声ガイドが取り入れられているが、多様な言語に対応し、かつ年齢層に合わせた音声ガイドはまだあまり広まっていないため今後そのような音声ガイドが増えていけば、美術館をより楽しめる人が増えるのではないかと考えられる。将来、学芸員として美術館で働く事ができた際には、本調査での学びを活用していきたいと考えている。

2. 今後の研究について

フランス近代の風景画に関する調査を通して、フランス近代の風景画史の流れを掴み、作品と実景の比較によってそれぞれの画家たちが風景をどのように解釈し、風景画に描き表してきたのかを学ぶ事ができた。今後は明治時代に日本人画家たちが制作した洋画へと視野を広げて研究したいと考えている。特に今回焦点を当てて研究したカミーユ・コロート、フランスへ留学し、グレー・シュル・ロワンなどで風景画を制作した浅井忠や黒田清輝とのつながりを研究したい。

また今回の調査を通じて、迷った時やわからない事があった時に現地の人々が助けてくださりとても助かった。特に、訪れた美術館スタッフの方々は、作品の場所などを尋ねた際に、快く教えてくださり、ミレー美術館のスタッフの方は、美術館について丁寧に説明してくれたのち、気になる事があったらなんでも尋ねて欲しいと言ってくださった。しかし、現時点での語学力では至らない点が多く、円滑なコミュニケーションが難しかった。研究を深めるために、語学力の大切さを再確認したため、今後さらに意欲的に学習に取り組もうと考えた。

3. 参考文献

- ・井出洋一郎『バルビゾン派』東信堂、1933 年
- ・永井隆則『ポスト印象派とユートピア』三元社、2025 年
- ・地球の歩き方編集室『地球の歩き方フランス 2025～2026』株式会社地球の歩き方、2025 年
- ・『コロート 光と追憶の変奏曲』国立西洋美術館、2008 年

4. 参考サイト

- ・オルセー美術館 HP：<https://www.musee-orsay.fr/en>
- ・ルーヴル美術館 HP：<https://www.louvre.fr/en>
- ・バルビゾン派美術館 HP：<https://musee-peintres-barbizon.fr/fr>
- ・ミレー美術館 HP：<https://www.musee-millet.com/>
- ・オランジュリー美術館 HP：<https://www.musee-orangerie.fr/fr>

- ・ カルナヴァレ美術館 HP : <https://www.carnavalet.paris.fr/en>
- ・ プティ・パレ美術館 HP : <https://www.petitpalais.paris.fr/en>

謝辞

最後に、本調査を実施するにあたり、多くの方々にご協力いただきました。ご指導いただいた阿部成樹先生、文学部事務室の方々、このような活動の機会を提供してくださった中央大学関係者の皆様に感謝申し上げます。